



# 十一



泰然自若

## 第一話

---

「一磨、生きて」

夢はいつもその言葉によって終わりへと突き進んでいく。夢の中の暗がりは夜を指し示すものだが、やがては光りを発し世界を白く染めていく。

一磨はそんな夢を良く見るようになったのは、六歳の頃からだった。

物心が付いた頃から一磨は母と二人きりで生きてきた。一磨の住まう家はとても大きく、それはたいそう立派な家柄の子供だった。その家の中で、二人は生活していた。

宛がわれた一間は広く何も置かれていない畳の世界。襖を開けて外を眺めれば、そこには手入れが成された綺麗な園が広がり、真剣な眼差しで庭師が働いている。

一磨は真っ赤な林檎のようなほっぺを膨らませながら、への字の口を作り、そんな世界を作り出す壁の向こうに見えた青空に焦がれた。いつか、あの壁の向こうを母と共に歩きたい。幼い心にそう誓い、一磨は生きていた。

そんな一磨が、ここはこんなにも小さな世界だと知ったのはいつの頃だろうか。人々は何故、こんなにも辛く当たるのかを考えるようになったのはいつからだったか。

物心が付いた頃から一磨は母と二人きりだった。間違いではない。

一磨とその母にとって、広い家での生活は不自由だった。傍から見れば金は腐るほどあって、物に、食に困る事なんてありえない。そんな環境で、一磨と母は生活していたにも関わらず、その母は全てを投げ出してしまった。その狭い世界と、日常化する憎悪の波に耐え切れず。

「一磨、生きて」

思えばその言葉は悪魔の囁きに他ならないと、一磨は夢を見つつも振り返る。

「一磨、生きて」

生きてという言葉が夢の中で何度も、何度も呟かれていく。

様々な場面が切り取られながら、夢はどんどんと彩られていく。その場面ばめんのことごとくに、一磨の母である女性の姿があった。

今も一磨の見る夢に出てくる母は美しいままの姿で立っている。どの姿も一磨には美しく、気高い存在として描かれてはいるが、肝心の顔は霧に隠れてしまっているかのように、曖昧だった。

その母の姿が突如として、霧のように乱れ漂い消えてしまう。

おぼろげながらその霧の向こうで見た光景が、瞼を閉じるような刹那の間に別のものへと変わっていた。

暗がりの中で、一磨は即座にその場面がどういうものかを察する。それは何度も見続けてきた光景だった。

――今はもう、解っている。

母が幼い頃の一磨に向けた笑みは悲しげだった。それが夢の中だけの顔なのか、本当に当時の顔そのままなのかを知る術はもうありはしない。

その日は、一磨にとって母と過ごした最後の夜。奇しくも、二人きりで壁の向こうを歩いた記憶だった。

「辛いと思うなら」

その母の顔はとても穏やかだった。白い肌と同じような白銀の髪色が、風に揺れ動く姿は幻想的だと一磨が思えるほどに。

「私と一緒に来たいのなら、手を取りなさい」

穏やかな夜だったと一磨は記憶している。月明かりと道を指し示すように灯っている灯籠だけが目印の暗がり、母の白い肌は良く見えて――今でも忘れる事は無く、こうして夢として広がっている。もう、何回目かも覚えてはいないほどに、一磨にはありふれた夢。

母と離れ離れになりたくない。ずっと一緒に居たい。幼い一磨はそう思っていた。その思いが夢だと理解している一磨の冷たい視線の内に流れてきては、一磨の心締めつけていく。

当時の一磨は、悪者にされる母を助けることが出来るのは自分だけだと信じていた。今の一磨が鼻で笑えてしまうほど、当時の一磨は清廉としていた。何も知らず、何も判らず、ただ漠然と母を想い、何かを恨みながら、何となく生きていた。

子供だった、それが子供の生き方だとも今では理解している。判ってはいるのに、自分自身が許せずにいる事もまた事実だった。

「何処へ行くの？」

歩けど歩けど、母は何処へ行くのかを言ってくれなかったが、一磨は手を繋がれながら母を信じ付いては行くが、やはり視線は不思議に思って母の顔に向く。

現在の一磨は思う。この時、母は一体何を思って自分の手を引いたのだろうか。

母は幼い一磨と視線を合わせる事も、まして一瞥すらも拒むかのように固く、固く前を見つめていた。

場面は急速に加速していく。現在の一磨がはっきりと視界を確認する時には、大きく口を開けた闇の御許へ足を踏み入れる寸前であった。

「寒い、寒いよ」

風もなく、波立つものすら存在しない内海の湖に、母は静かに入っていく。一磨は抱きかかえられながら、寒いと言い続け、迫り来る漠然とした恐怖に蝕まれていった。

――嗚呼、これは本当に怖かった。

現在の一磨が静かに脳裏で呟いた。

「寒い、寒い」

「大丈夫。私がついているわ」

しがみつくように、一磨を抱き締めた母は闇に消えて行くように、水の中へ徐々に沈んでいく。

気が付けば夢の世界が妙に白く発光していく。いつもそうだった、恐怖からかこの夢はいつも途中から真っ白く曖昧になっていく。一磨はそんな曖昧な夢の中で見続ける過去の出来事に思いを馳せた。この時の自分はどんな事を考えていたのだろうか、と。

怖かった。苦しかった。

どうして、どうして？

冷たく、何も見えない暗闇に放り出された感覚に襲われる。ただ、母の体温だけがまだ、一磨が一磨であるという事を知らしめていた。

母はどうしてあんなにきつく自分を抱き締めたのか。それは逃さないつもりだったのか、死ぬのが怖かったからなのか、考えてみたところで、いつも答えは同じ。

何もわからない。判らないが、今こうして夢で見ているのだから、一磨がそこで一緒に死ぬ事を選ばなかった事だけは確かである。

一磨は身動きが取り難い状況にも関わらず、必死の形相で自分の母の首に噛み付いていた。力の限り噛み付いて、動く限り爪で引っ掻き回し、母の腕から逃れた。

そこには何も無い、その行動はかくも単純明快で、言葉も思いもただ一つ。生きたい。助かりたい。本来生き物が持っているであろう生存本能によって突き動かされていた。

当時六歳だった一磨は、まだ死と言うものを漠然としか捉えてはいなかった。死ねばどうなる、死ぬ瞬間はどんな場面なのか、死とはどういうことなのか。そんな事を思い描く事すら出来ない子供だったし、それが普通だった。

そんな幼い一磨はこの時に初めて死を知り、死に直接触れ合ってしまった。虫を殺して、あるいは親族の死を経験して、死とは何なのかを考える、考えさせられるという月並みな経験を飛び越えて、自分が今死ぬかもしれないという事態に陥ってしまったのだ。あまりに性急すぎる事態

であったはずだが、一磨は初めて死に触れて、純粹に恐怖する事が出来たのだ。死にたくないと、心の中で叫び声をあげてその爆発が行動に結びついていた。

必死に母の腕から逃れ、岸を目指す一磨の背後には沈み行く母の姿があった。白い世界で一磨は視線を向けると母は悲しそうな顔を見せていた。今でも、母の白い姿が消える事は無く、夢に何度も出てきている。

「一磨、生きて」

やまびこが返ってくる、そんな反響を生みながら母の生きてと懇願する言葉が聞こえてくる。そこからは、唐突ながら世界が体裁を保てなくなったかのように、うやむやと光景が広がっていく。

一磨にとってこの記憶は、初めて生きるために身体を動かし、生きるために他を犠牲にしたもの。

生きる事を選んでしまった日。もはや後ろを顧みる事もせず、幼き日の一磨は必死に泳いでいた。犬掻きよりも不恰好な姿で、身体が動く限り岸辺を目指して泳いでいた。

揺らめく湖面と荒い息遣いが現在の一磨にははっきりと聞こえている。これが一瞬、夢ではないのかもしれないと錯覚してしまうほどだったが、何度も繰り返している一磨は冷静だった。夢を見ている一磨の瞳には一切の感傷が込められてはいない。漫然とただこの夢が早く終われば良いと思いながら、ひたすら気だるい瞳で過去を見つめていた。

この強烈過ぎる印象が、十六歳となった今でも何度となく夢として思い出してしまう要因なのかもしれない。

この日から一磨は一人で生きていくことになり、一人で全てを受け止める必要があった。

死ぬ事は許されない。この時、一磨は誓ってしまっていた。絶対に生きると。母のためにも自身のためにも生き抜く。幼い一磨はそう決めてしまっていた。それは覚悟だったはずだ。母を殺して、自分が生き延びたのなら、母の分も精一杯に生きよう。そんな幼い一磨の覚悟を、現在の一磨は忌々しく思っていた。今更どう足掻いても変わる事はないにも関わらず、心情は非常に単純で、過ぎた事をいつまでも抱え込み、恨んでいる。

ようやく夜の夢が終わりを告げる。未だ岸を目指し幼い一磨は泳いでいるが、世界が急速に白み始めていく光は、夢が終わり、地獄の日々が始まる合図である事を一磨は知っている。

ゆっくりと夢心地から開放されると、一磨は小さく息を吐き出した。

部屋の中はまだ暗く、障子を透けて入ってくる光は優しい色をしている。まだ、日の出には早かった。

## 第二話

---

十河家。内海地方で名を馳せた武家の一門。かつて、この地を治めた内海家に仕えた家でもある。

その十河家が所有する白い壁に囲われた土地内には立派な稽古場が二つ存在し、内海湖が作りなす朝もやの中でも、竹刀と男達の気迫が響き渡る。一つは門下生を取って指導する道場。もう一つは身内を稽古し、大殿と呼ばれる一磨の祖父との稽古に使用される小さい稽古場だった。道場は表門の前にどっしりと居構えているが、小さい稽古場は屋敷の後ろ、表門から最も離れた場所にこじんまりと佇んでいた。

今、小さい稽古場では二人の男が竹刀を向け合っている。一人は白の総髪を後ろに蓄えている老人。線が細い体つきではあるが、握る竹刀は揺れてはおらず、相手を見据える視線は鋭い。まるで真剣を思わせる鋭利さを兼ね備え、対峙する少年に向けられていた。

対する相手は僅かながら薄い黒の色合いを髪に持つ少年。背丈は老人よりもあり、研ぎ澄まされた綺麗な卵型の顔立ち、なめらかな白い肌が印象深い。

両者は別段言葉を交わすわけでもなく、道場で聞こえてくる裂帛を放ち合うこともせず、徐々に間合いを詰めてはにじり寄って切っ先が揺れ動かす動作が行われている。交わりはしないが離れすぎてもいない。傍から見れば奇妙な間合いだった。打ち込むにしては少し遠いように見える。

遠くから小さいながらも聞こえていた威勢の良い声がぱたりと止んだ。朝稽古が終わったのかもしれない。

今、この世界では音が消えてしまっている。閑散と開け放たれた障子と廊下を隔てた庭園でさえ、鳥のさえずりも、風が木々を奏でる事もなかった。

息が詰まるほどの静寂が、老人と対峙する少年――十河一磨に纏わり付いてきていた。重い、その空間の真っ只中で一磨は竹刀を握り、呼吸を整えながらも対峙する相手からの攻撃に反応するべく正眼に構え集中している。中段の基本形は僅かに刃が内に向き、相手の胸より少し上、鎖骨あたりを切っ先が捉えている。

全ての機先に反応しなければ、また痛い思いを味わう事になってしまう。一磨はその思いを胸に秘め、無意識のうちに一步、すり足で下がってしまった。まだ打ち込まれてもいない内に、一磨は祖父の放つ威圧に吞まれてしまっていた。いつもの事である。一磨は得体の知れない化け物を相手取るという奇妙な感覚に襲われている。一磨にとって、祖父はそういう人物だった。

一磨の祖父は強い。子供の一磨が太刀打ちできる相手ではなく、祖父は今なお現役の師範代を

打ち負かす気迫と技術を持っていた。今も、まったく動く気配すらなかったのにも関わらず、一磨は身を引く決断を無意識に下し、それを実行して間合いを取ったにも関わらず、祖父が一磨の目の前に迫っていた。

元来、刀において間合いは勝敗の優劣を決める判断材料になり得る要素だった。見たところ、身長では一磨が勝ってはいるので、間合いからいけば僅かに有利のようだが、両者に存在するその差はあまりにも微々たる物でしかなく、優劣に反映される事はなかった。

一磨にはその祖父が鋭い一撃を放ってくる事を理解している。腰を折った祖父が視界から消えるようにして、下へ潜り込んで来ている。一磨は放たれるであろう抜き胴を避ける事は出来ないと既に悟っていた。

悟っているからこそ、一磨の身体は素直に動いていく。

胴に来る。力を入れろ。だけれど決して我慢するな。痛がれ、もう立てないと思わせるんだ。一磨の願いに身体は忠実に反応をして見せるあたり、相当に鍛錬を積んできている事が窺い知れる。

一磨は祖父の一撃を甘んじて受けた。真剣ならば、腹を一文字に斬り裂かれ内臓があふれ出てくるところだろうが、これはあくまで稽古。一磨に襲い掛かったのは、一瞬だけ左わき腹の感覚が失われ、即座に振動しながら容赦なく針を突き刺されているような痛みだった。

祖父の一撃は本当に容赦がない上に堪らなく痛いことは一磨が浮かべる苦悶の表情からも一目瞭然だった。いくら一磨が腹に力を入れようとも、その痛みが消え去る事は叶わない。一磨は痛がって見せたが、その痛みは本人からすればこの一撃は、ある程度、ほんのちょっぴりだけ慣れた痛みとなっていた。身体はせめてもの抵抗をと思い痛みを和らげるよう一磨の意思とは関係なく動いていた。

一磨はその行動を必死に隠す。痛くないと思われれば何をされるかわからない。なら、現状を受け入れ、現状で満足させる必要がどうしてもあったが、痛いことに変わりはない。

祖父の一撃は、元々演技なんかしなくても痛い。いくら慣れた痛みといっても限度というものがあるということだ。

激痛である事を無意識に理解しているからこそ、一磨の身体は勝手に動いてしまう。それほど、染み付いたと言って良い癖のようなものだった。どの部分で受け止めると痛みを緩和できるのか、身体はそれを覚えてしまっていた。

出来る限り刺激が襲ってこないように腹筋に力を入れてもなお、激痛と呼ぶに相応しい感覚が這ってくる。

身体の中から何かが喉を駆け上る感覚に耐えつつも、千本で勢い良く刺されて行くような痛みには堪らず眉間に皺を寄せて、目を瞑り歯茎を見せてしまった。手は自然と打ち込まれたわき腹と

口元に向かい、竹刀は音を立てた。

一磨は膝を折った。苦しくて、乱れた呼吸を必死に落ち着かせようとしている。

これが、十河一磨の日常だった。

頭を打たれれば意識が飛び、水を掛けられ、打ち合いは続けられる。何処を打ち込まれても結果は殆ど同じ。立たされて、満足するまで相手をさせられる。今日は腹だったという違いだけ。

たった一度、打ち合いとすら呼べない稽古を経験しただけなのだが、一磨の身体は悲鳴を挙げている。それほどに祖父の一撃は強く、対峙して浴びせかけてくる威圧は無言でありながら裂ぱくを感じさせるほどだった。

「立て」

「はい」

祖父の無慈悲な要求に一磨は苦しみながらも返事をする。

拒んだ事は一度たりともありはしなかった。拒めば、何をされるかわからない。

予めどうなるか判っている方を選び、どう対処するかを考え抜いた方が良いと一磨は思っている。

その考えの元、呼吸を整え再び構えを作ったのである。

構えは先ほどと変わらない正眼で、間合いも先ほどと変わらない。切っ先が交錯し、僅かに上下する。刀身でいうところの鎬（しのぎ）で交わる竹刀の攻防は、またしても祖父の拳動によって打ち破られる。

一磨は一度でも祖父に自分から触れた事は無い。いつも祖父が触れてくるのだ。

今も、一磨は祖父を目の前にして、自身の右手首が切り取られた錯覚を覚えると共に腕を駆け上ってきた激痛に顔を歪め、竹刀を落としてしまっている。

「立て」 「はい」

先ほどと同じ事が繰り返される。

祖父は一磨に触れる。妥協を許しはしない。痛めつけるのだ、徹底的に。

一磨にとって、この世界は全てがそう出来ていた。この狭苦しい世界ではそれが普通だった。祖父のように厳しく、無慈悲だった。

挨拶をすれば無視をされ、しなければ挨拶しろと手と暴言が飛んでくる。食事は皆が食べた後に残飯を食らい、後片付けは使用人ではなく、全て一磨が始末をつけた。

鍛錬という名の体罰が日常化、日課とも言うべきものに変化し、一磨の身体はいつも傷だらけだった。

罵声にはいつも汚い子、忌み子が付き纏う。汚物を見るしかめ面を張り付かせ、一磨を嫌う。一磨に投げ掛けられる悪口は、自然と一磨の両親に向けられた侮蔑にもなっていた。一磨がその事に気付いたのは八歳か、九歳の時分であった。

時に稽古で打ちのめされ、時に躰と称し殴る蹴るの暴行を受ける中で、一磨は思い続けた。何の罪がある。生まれたくて生まれてきたわけじゃない。生まされてこの世界に落とされたんだ。全てを押し付けて、一体何をさせたいのか。

激情を吐き出す事が出来るのならば、どれだけ楽だったのかを考えることはない。吐き出せばどんな体罰が待っているのかを考えてしまう。決して口には出せず、思いを必死に呑み込んでいた。

一磨は打ち合う。甲高い音が何度か響く。太刀筋は完全に読まれているのか、思うように攻め込めずに弄ばれる。

「この程度で攻めあぐねるな」

祖父の叱咤が、攻防の移り変わりと共に放たれる。

「申し訳ございません」

一磨は逆に打ち込まれながらも口を開いて謝った。

一磨の母は綺麗な人だったと言える。十河家の誰もがその事に対して文句は言わなかったのだから、本当に美しかったのだろう。

母は一磨にとって美しくて気高く、それでいて優しい存在だった。自慢の母だったとも思っている。常に優しく接してくれた母だった。一磨はその母を自慢に思いつつ、恨んでも居た。

一磨の母が自殺してから、もう十年にもなる。十年間、母が何故死を選んだのか。一磨は味わい続けている。

言われなき誹謗中傷に口ごたえでもすれば、たちどころに折檻の対象となり、恍惚な笑みを浮かべた親族達が一磨の身体を痛めつけた。口ごたえせずとも目が気に入らない、態度が不良だ。理由というにはあまりにも稚拙で適当なものを浴びせかけながら口実を作り、一磨は痛めつけられた。

これは、教育だ。これは、躰だ。

耳にタコが出来るほど聞いた言葉をまるでお経のように続けていく。その様を、それこそ脳裏に烙印でも焼きつかれたように見てきていた。

――どうして僕はこんな生活を送らねばならないのか。

そんな判りきっている事を考えては、人知れず涙を流す事もあった。今では涙を見せる事も

ない。見せれば笑われ、体罰は深刻になっていったからだ。良い気味だと罵られ、一磨は地べたを這う。だからこそ、泣く事を止めた。

「今日は先客がある。ここまでだ」

いつもより短い稽古が終わりを告げる。息をするのが辛いのは身体の至る所を打ち込まれたからに他ならない。それでも、一磨は声を絞り出す。

「ありがとうございます」

一磨の祖父は厳格な人だ。だからこそ容赦をしない。それでも、剣術指南役――師範代からの暴力を受ける稽古よりはまだ、祖父との稽古は鍛錬という言葉の範疇に収まっていたとも言えてしまう。

一磨にとって、それが唯一の救いとなっていた。

「汗で床が汚れておる。きちんと掃除しておけ」

祖父はそう言って、立つ事も出来ない一磨を一瞥してから、稽古場を後した。

一磨は、正座するようにその場に崩れ落ちた。小さな稽古場には誰も居ない。独り、だからこそ、許された。

言葉にせず、声を挙げず、一磨は思いを胸中にぶちまけていく。

これは一体何のための稽古なんですか。教えてください。僕が痛めつけられるだけの稽古に何の意味があるのですか。人を殺すための稽古を、どうしてこんなにも苦しみながら経験しなければならないのですか。何のために僕はこんな事をしているのですか。僕は一体、何の為に生きている。何の為に、こんな仕打ちを受けているんだ。

一磨はその思いをぶつける事も、吐き出す事も出来なかった。ぶつけてしまえば、吐露してしまえば、今の日常がもっと悪いものになってしまうかもしれない。そう考えてしまうと、どうしても怖かったのだ。

一磨のその考えが自分自身を縛りつけ、邪魔をしてしまい、どうしても動く事が出来なかった。

神様が居るのならば、助けてくれても良さそうだと考えたりもした。

本当に神様が居るのならば助けてくれる。その前提条件に一磨は思わずため息を打ち漏らす。よくよく思ってみればそれこそ高望みでしかない。どれほどの人間がこの大地を跋扈しているかを考える。この十河家が存在する広大な内海の地でも、十万を超える人々が住んでいる。いくら軍神様に女神様が祀られるこの内海でも、自分だけに構ってくれる暇なんてありはしないと思いつく。

再度、先ほどよりも幾分長いため息を鼻からゆっくりと吐き出した。そのまま深呼吸を何度か行う。幸いにもここには一磨以外に人は居ない。気兼ねなくため息のような深呼吸を吐き出す事

が出来ていた。

落ち着いたのか、一磨はゆっくりと身体を浮かせて起き上がると、重い身体を眩しく光る外の世界に向けた。綺麗に手入れが成されている緑の奥。そこには白い壁に黒い瓦を被った壁が聳えている。

一磨はその上に広がる世界を眺めた。一磨の身長でも手を伸ばし、全身を使えば飛び越える事が出来るその壁の向こうに見える空は、白い雲が悠然と流れ、青々とした天空が人々の住まう内海全体を覆っている。その光景は、綺麗だった。

もうすぐ春がやってくる。こここのところ、癩癩を起こす赤ん坊のように天は荒れたけれど、ようやく落ち着いた兆しが見え始めている。今日は晴天に恵まれているところから察するに、予想は当たっているのかもしれない。一磨は、ゆっくりと立ち上がった。

震えている身体にもう少し頑張ってくれと無意味な励ましの言葉を掛ける。節々は変わらず悲鳴を挙げている。もう少し休ませてくれと懇願してきているも、一磨はその要求を断り続ける。受諾してしまえば、さらに酷い仕打ちを受けてしまうからだ。

祖父ではない。一磨の姿を見た者は皆、こぞって一磨を痛めつけるだろう。喜々として、蹴りつけ、殴り、弄ぶ。

想像してしまったかのように、一磨は首を左右に振った。

それは駄目だ。それだけは御免被りたい。痛いのは嫌だ。これ以上痛い目を見たくは無い。一磨はその思いに基づいて動き出す。

### 第三話

---

一磨は稽古場の掃除を終え、屋敷にある土間へ向かっていた。

長い廊下から横に目を向ければ見事な庭園が広がり、庭師が三脚に跨りながら庭木の手入りに精を出しているのを望む事が出来る。

一磨は庭師に会う事をなるべく避けるように行動する癖がついている。

嫌な思いをするからだというのがその主な理由ではあるのだが、今の一磨はその庭師に挨拶をするべきか迷っていた。

視界に入っている庭師は一磨の記憶するところ、最近十河家にやってきた庭師で、見たところ白髪が混じる中年男だった。

一磨は庭師と限定する事無く、他者との関わりを怖いと思っている。にも関わらずだ、一磨の根底には人と関わりたいという欲求も持っていた。その欲求ゆえに一磨は挨拶するべきかを逡巡し、思わず立ち止まっていた。

庭師からすれば、廊下に佇みつつもこちらを凝視してきていると思しき一磨の存在に気付き、一瞥してから嫌そうに顔を顰めていた。

「お早うございます」

結局、一磨は挨拶を口にしていて、挨拶するという行為ときちんと聞こえるくらい大きな声で挨拶出来た事に安堵しつつ、顔は僅かに沈んでいく。

庭師が何も聞こえてはいないかのように仕事に没頭しているからだったが、一先ず集中しているからきっと聞こえなかったと思い込むことにした。

廊下を渡る一磨は明らかに沈んでいた。簡単に気持ちを切り替える事が出来るのならば、一磨はあれほど挨拶一つで逡巡などはしなかつただろう。淡い願いを未だに持ち続けていた自分の思い上がりに思わず双肩を下げてしまっている。

何度か似たような場面に遭遇しては落胆している事は一磨は気付いていない。外から来る人間に対して、希望を捨てきれないでいるのだが、自分から積極的に関わろうという気になれないのは、これまでの経験から言えば仕方ないのかもしれない。

一磨は努めて気持ちを切り替えようと口を一文字に結ぶと、視線を前に向け長い廊下を踏みしめていく。

人と出会う事から逃げ、体罰を受けぬようにひっそりと誰かのご機嫌を伺い、痛みを抑えるように身体を動かし続け、この広い家の中という狭い世界で生きていた。

今日もいつもと同じ日常だったはずだが、珍しく一磨の身に小さな変化が起こっている。祖父との稽古は早く終わったのだ。

いつもより痛めつけられる時間が短かった事に一磨は歓喜はしたが、持続はしない。

稽古場の掃除をしっかりと行い、他の者と会わないよう時間を調整するなどして、とにかく人との出会いを避けていたからだ。

結局、庭師に挨拶こそしてしまったが、これは仕方がない。彼らも仕事をしなければ怒られてしまうので会おうべくして出会ってしまったのだ。挨拶は自業自得でしかない。

こと、外部からやってくる人間に対しては変に意識してしまう一磨だったが、そうした人物が段々と十河の者になっていく様を見るのが辛く、それでいて哀しく思っている。虐めにこそ参加はしないが嫌悪している態度は露骨だからだが、結局のところ、一磨自身がそうした変化を認め、諦めてしまっている。

嗚呼、これが当然なのか、と。違和感すら覚えずに受け入れてしまっていた。

そんな中、唯一の安らぎは今という時間。祖父との稽古終わり朝食、夕食後程度の短いひと時。

祖父との稽古終わりはいつも身体が痛み、苦しくも確定した朝の習慣だった。日暮れには朝の稽古が再び行われる。辛く、苦しい日常ではあるが、一磨にとって最も痛いのは稽古場を出てから行われる鍛錬や躰と言われる虐めだ。安息を得られるひと時でも、誰かに会えば言われ無き体罰の名目をでっち上げられ、一磨はせっかくの安息日としているこの時も例外なく痛めつけられてしまう。

実経験を踏まえながら、なんとか虐めを避けたいという思いを持ったのか、自然と足早となった。

全身の痛みに耐えつつも半ば祈る思いで廊下を渡りきろうとしていたのだが、今日に限って、一磨の日常に大きな変化が訪れる事になる。

鈍い重低音が一磨の背後から迫ってきた。何か物でも落ちたな、と素直に思い描けるほどの重い音。加えて男の甲高い悲鳴が一緒くたに聞こえてきては、流石に一磨も振り向いて視線を庭に向ける。

三脚が倒れているのが見える。一磨の視界は、そのすぐ脇には先ほどまで仕事に精を出していた庭師が仰向けで倒れていた姿を捉えた。

家の中が一斉にざわめき立つほどの大声だったようだ、たちまち表屋敷が騒がしくなっていくのを一磨は肌と耳で感じ取っていた。

咄嗟に、一磨はこの後どう行動すれば良いか思案していく。何が出来るかは解らないものの、ここで何もせずこの場を立ち去るか。いやいやそんな事をすれば、口実を与えて虐められるかもしれない。そう考えた一磨は思わず庭師に駆け寄ってしまった。駆け寄ったところで一磨に出来

る事は少ない。にも関わらず、虐めを受ける事への恐怖となんとか逃げたいという重いから生まれた軽率で衝動的な行動に走っていた。

多少の医術、といっても刃傷の応急対処法程度しか叩き込まれていないのに、腰と背中を強く打ったであろう白髪の間白の混じる壮年の男を介抱できるわけがなかった。

このまま何もせずにいるのは宜しくない。駆け寄ってしまったからには、何かしなければならなかった。

「大丈夫ですか」

一磨はとりあえず、声を掛けた。若干、声が震えているのは期待と不安からか。

庭師は苦悶に顔を歪ませ、息が満足に出来ていないようだった。

一磨はその顔を覗きこみ、思わず息を呑み込んだ。己の立場を再認識させられた気分になり、厭世観の坩堝（るつぼ）に嵌っていく。

この生活に耐えるほか道は無い。

今までどのようにして生きてきた。決して口を割らず、決して反抗せず、決して相手の機嫌を損なわせないように細心の注意を払って一磨は生きてきた。

それは何故だと考えれば迷わず生きるためだと言えるのが一磨だった。にも関わらず、その生活を続けてきた一磨は庭師の反感を買ってしまっていた。庭師の顔は苦悶と怒りに打ち震えているように感じられ、それこそ一磨の責任でこのような被害を被ったと言わんばかりだ。いや口を開き言葉を発する事が叶うのならば、恨み辛みを吐き出したに違い無い。

一磨は身体の熱を感じていた。呼吸が乱れ、泳いでいた視線は一点に集中し、また泳ぎ始める。

一磨は焦っている。

――今、目の前で起こった事をどう説明する？

頭の中で様々な言葉が浮かんで霧散していく。どれもこの場を打開できるとは思えないものばかりだったが、一磨は必死に考える。

庭師を三脚ごと突き落として怪我をさせたわけじゃないと視線の先で冷たい眼差しを向ける祖父に弁明するのか。庭師の拳げた叫び声を聞きつけて近寄ってくる家中の者に、自分は庭師を助けようと近寄っただけで、自分が仕出かしたわけではないと土下座でもしながら釈明するしかないのか。一磨は頭を振った。絶対に嫌だと思った。どちらにせよ待っているのは拷問のような虐め。情景が浮かんでしまうほど現実味を帯びている。

思わず視線を縦横無尽に動かし、逃げ場を探し、ある一点で一磨の視線は釘付けになった。荒

い呼吸が徐々に整えられていく。

――違う。違うだろう。十河一磨。

もうどうする事も出来ないのならば行動するしかない。一磨は言い聞かせていく。喜べと、今、新しい選択肢が増えた事を喜べと必死に言い聞かせた。

視線は白い壁と黒い瓦の上に広がる青い空を見つめていた。壁の高さを一磨は知っている。自分の身長を考えれば、跳んで瓦に手を乗せる事は容易い。身体を持ち上げる力を持っている事も知っている。

今こそ踏み出すべきだ。一磨は自分に言い聞かせる。恐れている理由はないと。ここから逃げ出せば全てが過去の遺物となってしまう、ならば迷う必要はない。必死に自問を繰り返すも身体は震えるばかりだった。

全身が稽古中と同じような息苦しさや熱気に包まれていく。じわりと背中に汗が滲んで行くのを一磨は感じていた。

――動け、動くんだ。今、ここに僕を遮る物は何も無いが飛び出す理由は出来ているじゃないか。何を迷う。そして何故、僕は今まで気付かなかった。こんな簡単な事に何故気付かなかった。……いや、違う。違うんだ。判ってた、判ってたのに――。同じになりたくはなかった。僕のちっぽけな思い込みが邪魔をしていたんだ。

「駄目だ」

無意識の内に一磨はその言葉に出していた。

迷っている、迷っているからこそ誰かに決めて欲しかった。誰かに決めて欲しいという思いが今の言葉を吐き出させ、一磨もその気持ちを知り、唇をかみ締める。もう言葉を発する事は絶対にしないと心に決めた。何を言い出すか、自分でも予測が出来なかったのだ。

迷うなど、言い聞かせ続ける。迷わず動けと必死に自分を鼓舞し続ける。身体は小刻みに震えるままで動こうとはしない。父と同じになってしまうのではないか、という建前と、逃げ切れなかった場合、自分にどんな仕打ちが待っているかを考える本音が介在し激しい攻防を繰り返していた。

――僕は違う。父とは既に違う人間になっているじゃないか。顔も名前も知らない僕の父は母さんすら捨てた。それに比べて僕は捨てるべき物が何も無いじゃないか。十河家なんて始めから無いようなもの。家督なんて継げるわけでもなければ家の中で重要な役割を担っていたわけでもない。ただはけ口として利用されてきただけじゃないか。動け、何も怖くは無い、変化を求めろ。世界はこんなにも狭苦しく、僕に辛く当たるものだけじゃない。もっと広くてやさしい、そん

な世界があるはずだ。僕は十年間、意味もない体罰を受け続けてきたようなものだろう……。生きると言われた、母さんにそう言われて今まで十年も耐えてきたんだぞ。生きる事は別の場所でも出来るじゃないか。この狂った世界で生きる道理は何一つ無い。きっと母さんは判ってくれるし、あの時生きるに行ったのは別の世界で生きて欲しいと願ってくれたからじゃないのか。考えるな、今は動け。動くんだ。

「一磨」

祖父の声、意外にも鋭くはなかったその声に一磨は機敏に反応して見せた。今まで石のように動こうとしなかった身体がその一声で白い壁へ向かって走り、力の限り跳んだ。瓦は太陽の光で熱いられていたが、今の一磨にとってそれは障害にはなりはしない。腕に力を入れる。思った以上に軽々と身体は浮き上がり、一磨の世界が開けた。

「何をしている！」

誰かの叫び声が一磨の背後から聞こえてきた。その恐怖の声がただひたすらに身体を外へ突き動かす。足は瓦に登った、そのまま中腰で瓦から外の世界へと飛び降りる。

砂利が足裏に突き刺さり、凍りつくような冷たさと共に痛みが一磨の身体を駆け上がってくるが、本人はただひたすらに歓喜した。

一磨は今、広い世界に降り立ったのだ。一人で、たった一人で塀を乗り越え、降り立った。背後から聞こえてくる喧騒に別れを告げる事もせず、ただひたすらに一磨は走った。

当てなんてあるはずもなければ、内海の地理を把握しているわけでもない。

行き先も判らず一磨は走る。そうするしか道はなく、どうするかを考える余裕すら無かった。走れば走るだけ素足が痛む。もしかしたら足裏は赤くなり、下手をすれば血でも出ているかもしれない。

今の一磨にはそれが良かった、それが嬉しかった。その痛みだけで一磨は興奮していた。

他者から与えられる痛みじゃない。他者から強制される痛みじゃない。他者から無意味に与えられる痛みなんかじゃない。

自身の行動と意志によって生じる痛み。自身によって与えられる思い通りの痛み。決して、他者から与えられたものじゃない。

この痛みこそ、本当の痛みだと一磨は確信した。この痛みこそ、一磨に新しい世界を走っている事を証明させていた。

外に出れば護衛と称し監視され、身なりだけは良くされた。十河家の人間として恥ずべき姿を見せるわけには行かないと強制され、一磨の醜くなってしまった身体を隠すように着付けをされ、十河家の一員というだけで奇異の目を向けられた世界ではなかった。

これが世界だ、これこそが世界だ。そう思うと自然に笑みが顔に張り付いていた。あんな狂った世界なんかじゃないと思っていた。

この痛みこそが世界であり、この痛みこそが生きている証なんだ。全身が総毛立ち、興奮に呼吸を乱れ、やみくもに一磨は走った。ただ走るだけがこんなにも楽しく、嬉しいものなのかと感動すらしていた。

空は何処までも青く、左に見える塀は何処までも続くかのような錯覚を覚えた。その下で一磨は走る。ただひたすらに、がむしゃらに当ても無く興奮する身体を冷ますかのように、走った。

全力で走る一磨の横に延々と追走してきた壁は終わりを迎え、一磨の見る世界はさらなる変化を見せていった。

## 第四話

---

一磨が一人で外を歩いた事が無いのは、周りがそれを拒むからだだった。理由無き外出はさも当然のように禁止され、修行や稽古と称された荒行。旧内海家臣団である武家衆との顔見せや合同鍛錬に同行する事はあっても、決して一人きりで自由気ままに歩き回る事は許されなかった。

外出の際に付き従うのは屈強かつ目と鼻の良い男達で、その男達は一磨が逃げ出さないようにぴったりと張り付き、厠にまで付いて来るほどだった。

息苦しい外出よりも、狭苦しくも限られた自由があった家の中が楽園に思えるほどの窮屈を覚えたほど、良い思い出が一磨にはない。

――今、僕は良い思い出のない内海の町を歩いている。たった一人で。

興奮冷めやらぬ思いを胸に秘めながらも、一磨は勤めて平静を装いながら街を歩く。

追っ手が掛かっている気配は無いが、油断は決してしていない。人生を賭けての行動を無碍に出来ない。

衝動的に飛び出した事だけは少々の悔いは残る。準備をしていればもっと余裕を持てたはずだ。とも思ったが、結局のところあの時の逡巡が全てだったのだから、今の状況こそが最善と思い直す。

今は草鞋、足袋すら履いていなければ、身銭を持っているわけでもない。

一磨はそっと人々の足元に目をやった。草鞋を履いている人も居れば、靴を履いている金持ちや流行に聡い人々も居る事が窺い知れる。様相も着物を着込む人も居れば洋服を来た洒落者も居る。対して一磨は裸足で、柳染めの着物に野袴（のばかな）という様相だった。身なりこそそれなりの着物を与えてもらってはいたが、それこそ体裁を保つ方法の一つとしての事だった。汚れでもつけようものなら、即懲罰が一磨を襲う。

着物に関しては、稽古着よりかは目立つ恰好ではない、それに顔を隠す必要は無いのも助かる事だった。一般の人々に、一磨の顔は知られて居ないだろうし、顔を知っているだろう家柄の良い者が徒歩で歩いているとは考えにくい。よしんば居たとしても護衛付きが自然、ならば発見も容易い。

一磨はそこまで考えると、思った以上に自分が冷静だと感じていた。初めて町を一人で歩いているのに驚くほど落ち着いている。他者の目を気にするわけでもないが、周囲に気を配りながら、丁寧に歩いていける。

やっていける。絶対に、やっていける。自信を持つんだ。一磨はそう言い聞かせると、まず身銭をどうにかして手に入れて内海を出ようと考えた。ここは十河の勢力圏、追っ手を出されるものと考え一磨からすれば、早々に立ち去る必要があった。

ゆったりと何食わぬ顔をしながら路地に入り、素足をどうにかするため、草鞋になりそうな代物を物色し始めながら、今後の行動予定を立て始める。

なんとかボロ切れを見つけると、打ち捨てられた縄で適当に自分の足へ縛り付ける。素足よりも大分マシになったと感じながら、取り合えず上着を売り払い、内海を出るところまで考え付いたところで、一磨は視線を上げた。

目の前には家屋の土壁があるだけだ。そのまま視線をゆっくりと路地の奥へと向ける。その先は昼間だというというにどうしてか妙に薄暗く、澱んでいると感じる光景が広がっていた。吸い込まれそうな感覚に思わず、一磨は一步、後ずさりして砂利を踏みしめた。

「おい、君」

唐突に背中から声を掛けられた。少々高めだが抑揚のある声で、一磨には滑らかな印象を持たせながら耳に入り込んできていた。

一磨はその声に驚いたというよりも、人の気配を察する事が出来なかった事に驚き、思わず顔を強張らせつつも振り返る。決して散漫だったと思ってはいない。十二分に気をつけていた。にも関わらず気付く事が出来なかった。

振り向いた先には女が立っている。影になっているが、身体にぴったりと合うような衣服は暗い地色で、腰には鞘が垂れている。足元を視界に納め、一気に緊張感が膨れ上がっていく。

軍人だった。一磨の記憶には帯剣を許可されているのは警官か軍人くらいしか覚えが無い。腰に一振り、左肩から細長い袋が見えている。それも刀と一磨は考えていく。

風体からして浮浪者が見るからに高そうな衣服を纏っているはずもない。身体にぴったりと合う灰色の上下に、靴は黒くて硬そうだ。この硬い靴で砂利を踏みしめていたのならばそれ相応の音がしてもおかしくはない。身のこなしが自然と気配を消すという動作を覚えて実践している。それに警官の黒色に染まる制服とは違うのだから、軍人に違いないと一磨は決め付けた。

銀色の髪の毛は短く軍帽に隠れているようにも見えるが、どうやら後ろで束ねているようだった。

引き締まった顎に、瞳は青々とした空のように澄んでいる。一磨には、その女がすぐに異国の人の混血だという事が判った。内海にはそういう人が多いのだが、銀色の髪の毛は珍しかったからだ。

隙が無いと一目で判る出で立ちだと判断した。無意識ではあるが、その判断を可能にしたのは祖父との稽古があったからだ。ともかく、一磨はこのまま走って逃げる選択肢を即座に捨てる。狭い路地に短い間合い、相手が女であろうと自分よりも腕の立つと仮定している一磨からすれば

、普通に走ったところで逃げ切れるはずはないと考えていた。

――ならば、戦うか？

頭に浮かんだ言葉をかき消すように、それこそ無謀だと皺が眉間に寄った。相手は本物の軍人。対して一磨は武家の人間、といっても稽古しか経験がない。いきなりの実戦をやれなんて無理な話だった。

状況が許すのならば、一磨は間違いなく逃亡を選んでいた事だろう。

「良い面構えだな。それに身体も良い」

軍人は一磨が武芸を身に付けている事を見抜いていた。軍人の言い放ったその言葉に、一磨はもしかするならば追っ手かもしれない。と考えた。

考えてみると途端に身体は熱くなっていく。高ぶる思いは、捕まりたくないという願い。

こんな所で捕まりたくは無いし、戻りたくもない。もう二度とあんな生活に戻りたくは無い。その感情が、一磨の身体を熱していく。

「僕は、戻らない」

声に出したのは覚悟を確認するためだった。

「僕は、もう戻らない」

二度呟いたのは、目の前の軍人と戦う覚悟を決めたからだった。

「だから、捕まるわけにはいかない」

軍人の顔は険しかったが、初めて動揺を見せた。

一瞬。僅かに顔を狼狽させ、身構える事を躊躇させたその一瞬に、一磨は人生の全てを賭して、襲い掛かった。

腰を下げ、膝を折り曲げ、全身を鉄砲の弾に化けさせたつもりで一気に間合いを詰める。軍人の顔は一気に見えなくなり目の前に相手の腹が迫ると、そのまま右肩をぶつける。後は、軍人を押し倒して、後はそのまま走り去る。出来る、絶対に出来る。全ては思惑通りに進み後は逃げるだけになる。そうなるはずだった。

「良い判断だった」

――どうして僕は空を見上げている？

一磨の戸惑いを他所に、顔を影で隠すように見下ろしたのは押し倒したはずの軍人だった。その顔は、何処か嬉しそうに笑みを深めている。

一磨の背中に痛みが這って行く。

呼吸はきちんと出来ているし、身体はまだ悲鳴を轟かせていない。わけが判らなかつた。一体何が起こったのか。

「短い間合いに狭い路地。私が場数を踏んでいるという事を即座に理解し、警戒した。その用心深さが良い。何より、私が驚いた刹那を隙と心得、全てを賭して攻め立てた。その気概と思い切りの良さ。お前は、良い物を併せ持っているな」

一磨は何故か褒められていた。何故この軍人は自分を褒めているのだろうかと疑問に思いつつ、極自然な素振りで差し出された軍人の右手を取って、上半身を起き上がらせた。

不思議な感覚が一磨を覆っていた。目に見える全てが、今まで見た事無いような新しい代物に映るのは何故だろうか。とさえ思えたほどの変化を捉えていた。

「突進も中々理に適っている。体重を乗せて、腰目掛ける。……誤算だったのは私がそれらの定石を熟知していたという事実を君が知らなかつた、それだけだな。生半可な訓練をしているわけじゃないってことだ」

——嗚呼、そうか。僕は投げ飛ばされたのか。

一磨は今になってようやく事態を把握する事ができていた。と同時に、それはとんでもなく凄い事だとも理解する。一磨の突進する勢いそのままに、軍人は流れにそって身体を倒した。流れに逆らう事をせず、力を活かしたままその方向を変え、投げ飛ばした。

「受身までも良かったぞ。尤も、その顔じゃ受身を取ろうとしていたわけではなさそうだが、身体がきちんと覚えていた事に感謝するんだな」

一磨は自分の腹を左手で触る。そこには砂利がついていた。

身体を倒し、そのまま足を腹に当てながら、勢いそのままに一磨は宙を舞ってしまっていたのだ。

「あの、貴方は……一体」

僕を褒めてくれる人が十河家の者であるはずがない。その気持ちから、思わず一磨は聞いてしまった。動揺していたし、顔が火照り汗を掻いている。視線が泳ぎ、一磨は軍人の顔をまともに見る事すら出来なかつた。

「……人を探していてね。君みたいな逸材を探して這いずり回る。本当なら使者を連れた勧誘官がする仕事なんだがね」

「勧誘官？」

人を探しているとも言った。ともすると、この軍人は軍人になる人材を探す仕事をしているのかもしれない。

「軍人……こちらだと幾分古いが武士とか足軽という呼び名の方が聞こえは良いか」

言い終えた顔は、少し困っているようにも見える可笑しさを滲ませていた。思わず、一磨は赤面し視線を彷徨させた。

なんだかその笑顔が無性に嬉しかったのだ。それが何を意味する笑みなのか、一磨にはわからなかったが、理由よりも邪気のない笑みを向けてくれたという事が何よりも嬉しかったのだ。

「興味があるなら少しばかり私の話でも聞かないか？ 暇つぶしにはもってこいだと思うぞ」

眩しいほどの笑みを浮かべている軍人が、一磨には神様の使いに見えていた。

神様はきっと、自分の事をずっと見ていてくれたんだ。だから、この人を巡り合わせてくれた

。

そんな思いが溢れてきてしまった一磨は、急に顔を引き締めて口を開いた。

「お願いします。僕を軍人にしてください」

自分を変えたい。ここから逃げ出したい。だったら今を逃す手はない、ここで逃せば後がない。決意とは程遠い、懇願にも似た思いを内に秘めながら一磨は頭を下げていた。

一方、一磨の態度に軍人は少々面を食らっていた。勧誘するつもりがあることは先ほどから匂わせてはいたが、少年から願い出てくるとは思わなかったようだ。

「――判った」

それでも、軍人は大きく頷いてそう言った。

「全部私に任せろ。厄介ごとを抱え込んでいるなら全て吐き出せ。私が全て拭き取ってやる」

そう言って笑ってくれた軍人が、一磨には無性にかっこ良く映った。自分の持つしがらみ全てを取り払ってくれるかもしれない。

嘘だと思もしない。今はただ、軍人の言葉を信じて、頭を下げる事しか一磨には出来なかった。

「ありがとう、ございます」

涙が止め処なく流れて来る。それでもお礼の言葉をきちんとと言う事だけは出来た。理由は沢山ある。吐き出したい思いが一杯、一杯ある。涙はそれら全てを代弁するかのよう、途切れる事はない。言葉にならない思いを吐露し続ける一磨の背中を、軍人は優しくさすりながらも寄り添った。

「これから辛いことがあるぞ。軍人は他者を殺す勉強をしなければいけないからな。それでも良いのか」

「はい」

しゃくりあげながらもしっかりと返事をする一磨の肩に軍人はそっと手を置いた。

「そうか。……弱音は吐いても良いが、逃げ出す事は罪になるぞ。それでも良いのか。正式な軍人になっても、二年は除隊も許可できないぞ」

「はい」

一磨の耳からは女神のような優しい言葉が入り込み、身体を包み込む人の温もりが大きくて、それでいて堪らなく暖かかった。一磨は、その温もりにただただ感謝した。

「もう、ここには戻って来れないかもしれない。それでも良いか」

涙を止めるように目を力いっぱい瞑る。

「はい」

一磨は初めて自分の母以外から優しさを貰い、母以外から救いの手を差し伸べて貰えた事が、何よりも嬉しく、何よりも悲しかった。

あの世界がいかに狂っていたのかを実感させられ、いかに今の世界が正常なのかを認識させられていたからだ。

もう、戻らない。絶対に、あの世界には戻りたくない。憎悪にも似た一磨の決意とは裏腹に、涙は瞼を閉じようと途切れる事無く零れ落ちる。こんなにも一生懸命に涙を流す事を許されたのは、一磨にとって初めての経験だった。

――僕は変われる。僕は生きていける。頑張っていける。頑張ろう。新しい世界で、僕は一人前の軍人になって、誰かのために。そして、自分のために生きていくんだ。

その思いを胸に秘めて一磨はようやく嗚咽を止めた。

「最後に言うぞ」

一磨は涙を拭き取ると、真剣な表情で見つめる軍人と視線を合わせる。

「君はこれから別の世界の軍人。向こうは戦人と敬意を表しそう呼ばれているが……その戦人になる」

「――は、はい？」

一磨の声に、軍人も頭を搔いて苦笑いを浮かべた。

「細かい説明はゆっくりやろう。こっちに来たのは初めてでね。旨い店はあまり知らないが…  
…なぁに、飯くらいは奢ってやるぞ」

## 第五話

---

軍人の名はラーレ・マリー・ライヒェンという長いものだった。

軍人によると本来マリーという名は親しい人が呼び合う名前。書面上では明記するが、普通は名乗らなくとも良い名前だと一磨は説明を受けた。

ラーレからはマリーと呼んでくれて構わないと言われたのだが、とうの一磨にはその名を呼ぶ勇気もなく、事前の親しい者が呼び合う名という事を気にするあまり恐縮してしまっていた。当分は”ラーレ”と呼ぶ事になるだろう。

ラーレはアイリスと呼ぶ大陸に存在するヴォルバルク帝国の軍に所属する軍人だという話を蕎麦屋で蕎麦を啜りながら説明していく。

蕎麦は値段は安く旨い蕎麦屋だと一磨は感じていた。もう少し小奇麗に掃除をすると客が増えそうだとも。

「古来より、僕の世界とラーレさんの世界とは繋がりがあったという事ですか？」

「この内海という土地限定という言葉が付くがね」

ラーレの話によると、古くからこの内海地方はアイリス大陸と交流があったのだという。元々、内海家が支配していた土地柄。十河家は代々内海家に仕えていた武家である。

一磨も一応はその十河家の人間ではあるのだが、本人にはアイリスという単語は聞いた事が無かった。尤も一磨が愕然とするわけもなければ、知らない事を訝しがるなんて事もない。耳に入ってこない、教えられない事が日常茶飯事だったので、知らないけれど十河家は知っていたかもしれない。一磨にとってはその程度の認識だった。

「アイリスは古来より化け物との戦争を行っている。血みどろの生存闘争だ。どちらかが繁栄するにはどちらかが滅びなければならない。そんな争いを何百年と続けてきている」

化け物という言葉に一磨は啞然とする。いきなり魑魅魍魎と戦争をしていると言われても、困るだろう。無理もないがラーレの表情は真剣だ。先ほどのように、器用な箸さばきで蕎麦を啜っていた顔ではなかった。

「その戦争の火種がこちらの世界にも飛んで来かねない事態が起こる」

「それは……」

一磨の顔が沈む。異世界という突拍子もない存在と共に、内海が戦禍に巻き込まれる危険性があるなどと言われてしまえば流石に、考え込んでしまう。

「私がこの世界とアイリスを行き来することが出来る。それが答えだ。……門となる器を使うことによって、一定の周期間、往来する事が可能になる」

一磨は視線を泳がせる。予測はついているのだが、どうしたって実感など湧きはしない。それでも、唇が嫌に乾くのか湯飲みを一度口に運んでからゆっくりと、  
「帝国が負ければ、その門は化け物の手に渡り、使い方を知らればこちらの世界にも化け物が湧き出てくる。という事ですか」

相手の様子を伺うように、おっかなびっくり小さな声で喋る一磨。

ラーレははっきりとその言葉を、  
「そうだ」  
肯定する。

湯飲みを両手で抱えるように持ちながら、一磨は残り少なくなった蕎麦湯の白濁を見つめる。  
「門とは、なんですか？」  
顔を挙げる。一磨は狼狽はしている。してはいるが、先ほどよりも落ち着いている様子に、ラーレは目を僅かに細め感心する。

不安がりながらも自分が置かれている状況から多くの知識を得ようとしている。その姿勢はラーレには好印象を与えていた。

「内海湖だ」  
「えっ？」

一磨は思わず声を挙げてしまった。ラーレの瞳が一磨を見据えると気恥ずかしそうに縮こまって肩を竦める。

「あの広大な湖が門となる。そして、その鍵は浮島だ」  
ラーレは微笑を浮かべながらも答えを一磨に提示する。  
「浮島って、あの？」

一磨はどうしても門の姿を想像できなかった。  
「内海湖の湖畔から見える小さい島だ」  
「だって、あそこは祠しかなくて、神事の時くらいしか」  
祖父くらい偉い人ではないと入れない場所。おぼろげながら一磨の記憶にそんな知識が残っていた。

「神聖な場所とすることで、無用な手が入る事を防いでいる」  
「本当なのですか？」  
「今に判るから半信半疑でも構わないさ」  
ラーレはそういうと苦笑いを浮かべた。

不安が無いと言えればもちろん嘘になってしまう一磨だったが、ラーレの思いと自分の思いを無碍にはしたくなかった。

僅かに震える身体を必死に落ち着かせながら、自分は異世界に行くと言った事を胸中で呟き続ける。

鼓舞しながらも、ラーレという人からの期待を裏切りたくは無い――裏切ってしまった時に見放されてしまうかもしれない、失望されてしまうかもしれない。

落胆される事への恐怖が、今の一磨を突き動かしていた。

「元々、交流自体は偶然の産物だったようだ。当初は内海に来たアイリスの住人の事を神として崇めていたそうだが、こっちだって神に縋りたい時分だった。巧く信仰心を掴みながら内海の権力者を説き伏せ、援軍と言う形で昔は兵を送ってもらっていた。そういった兵の中に、英雄と呼ばれるような人物が出てくると、私達は味を占めるようになる。しまいにはこちらにある信仰を持ち帰り、教会が崇める神にしてしまうほどにね」

内海に残る信仰といえば、夫婦神信仰だった。

「甲士と呼ばれる特別な甲冑を纏う事が出来る戦人には二種類あってな。天を舞う者と地を駆ける者――甲士については向こうで詳しく話すが、とにかく内海の信仰は戦いの神と豊穡の女神だろう？」

一磨は頷いた。内海を守護する夫婦神、神々の戦争に参加した夫の神は武功あげて軍神となり、妻は豊穡と生命を尊び慈愛の女神として、夫である神の帰るべき場所を守り続けた。

「それに肖り、天を守護する軍神に地を守護する女神。甲士をそれに当てはめ、天甲士と地甲士という名前をつけたんだ。最初は戦意高揚目的だったが、教会が今でもそれを利用し続けている。今ではアイリスにおいて一般的な呼び名にまでなっているな」

一磨は信仰心を巧み操って戦局を変えようとした事を悪いとは思わない。当時の人はどんな物にでも縋らなければ、何かが音を立てて崩れ落ちるほどに逼迫（ひっぱく）していたのではないかと考える事が出来ていたからだ。

つい先ほどまでの自分に、どこか似ているようにも感じられていた。

「今回も帝国は縋りたくなかったんだ。その英雄話にな。だから私が居て、この地で元々の権力者と直に相談でもしようかと思っていたところだったんだ。不甲斐無いと思うかもしれないが、化け物だけと戦争するわけではない。だからこそ魔族への抑止力して有能な甲士、そして戦人を揃えたいという思惑がある。たとえ、部外者を巻き込もうとね」

ラーレは力なく笑みを浮かべる。その笑みが何を理解しているのか一磨には判らなかったが、どうにもその笑みが哀しそうに見えていた。言葉通りにラーレ自身が歯がゆく、不甲斐無いと思っているからこそその笑みだったのかもしれない。

「今日は散策がてらに、その一件で事情を知る者と会ってたんだが、お偉いさんに会うのは苦手です。いぶんと疲れたよ。だが、その苦手を乗り越えてみたら中々どうして、良い拾い物をした」

照れているのか笑い飛ばそうとしているラーレを見ていると一磨はなんだか取り残されたような気分になっていく。この人は、どうしてこんなにも普通に笑う事が出来るのだろうか、と。

「一磨。君の事だよ」

「えっ？」

「良い拾い物。もしかしたら甲士の適正も高いかもしれないな」

何を言っているのか判らなかつた。面を食らっていると言って良い、何ともだらしない顔を一磨は見せ付けていた。

「安心しろ。一磨は私が責任持って軍学校に入れてやる。甲士の適正が低かろうが一磨はスジが良い。鍛えていけば良い戦人になれる。ひょっとすれば、適正が低かろうが出世して騎士になれるかもしれないな」

尤も、貴族連中ばかりでうんざりするかもしれないがな。ラーレはそう付け加えた。

――出世？

一磨は訳が判らず首を捻る。ラーレは一体何の話をしているのだろうか。一磨自身の話をされているにも関わらず、当人は他人事だった。

元より一磨はこれほどまでの期待を受けた事が無かったからか、完全に考えると言う事を放棄しているように感じられる。一磨にとって実感がない、まさしく夢心地だった。

「一磨」

「は、はい」

ラーレは再び、一磨の名前を呼んだ。幾分語尾を強くしながら言い放つと、一磨は肩を竦めながらも、ラーレの顔を見つめる。怯えている瞳だった。

「本当にお前は軍人、向こうでは戦人と言われる職に就くか？」

一磨の視線はラーレの元に置かれた湯のみに向かって下がった。握り続けていた手前に置かれている湯飲みを口に運び、一気に飲み干した。

「……はい」

今更、代える事を一磨は望んでいない。この機を逃せばまた元の生活に戻ってしまうかもしれない。

望むべき変化はラーレから差し出された手にしか無く、今、握る事が出来る最後の機会である事も理解している。一磨に拒む理由はない。

「良く言った。生活は保障する。だが正直なところを言えば、なれるかどうかはお前次第だぞ」

ラーレの言葉は力強かった。

「戦人は戦いの中に生きる人という意味。これも、内海から入り込んだ文化でもあるがね。だが、間違っっては居ないからこそ、定着しその名に誇りを持てる。……何故戦うのか。それは、戦わなければ守れないものがあるからだ。そして、戦いたくても戦えない者のためにも、私達は命を賭けて戦い、化け物を殺し、時に人間をも殺す」

身震いが一磨を襲う。祖父との対峙を思い出していた。正眼で構え合う状態を連想してしまうほどにラーレの視線は力強く、真剣だった。

かつて、内海の地は北の激戦地として名を馳せた。数多くの戦が起こり、勝った負けたの殺し合いが行われた土地。十河はその内海で武家と認知されている。数多くの戦に参戦し、戦ってきたからだ。

一磨にもその十河の血が流れている。

人事だ、などと一磨には思えなかった。十河は仕えていた国を失っている。内海という国を、内海家を守る事が出来なかったという歴史的事実が存在し、十河家も一時は取り潰されてもいる。

「生きるため、守るために命を賭して戦うんだ。我々戦人が国を守り、貴族達が土地を治め、王が国を管理する。一つでも欠けてしまえば、国は回らない。特に、我々が居なくなれば誰が守る。化け物だけじゃない。人間同士も未だに不毛な謀略を巡らせ、領土拡大を狙っている。勿論、我が帝国もだ。内も外も守るには抑止力となる戦人の質が関係してくる」

一磨の身体は急速に火照っていく。

一磨の中にある血が騒いだのかもしれないが、誰よりも一磨はその血を嫌っている。この血のために今までどれほどの苦痛を味わってきた事か。そう思っているにも関わらず、一磨の身体はラーレの言葉に興奮していた。

戦う事の意味と、失う怖さを十河は知っている。内海は知っている。その血と歴史が一磨には刷り込まれている。

ラーレの言葉は、一磨にとって重く、それでいて胸のうちに酷く響いていた。嫌っていた血が騒ぐのを嫌悪している自分と、興奮している自分。その二つの相反する気持ちが、身震いという形で外に発散されていた。

「一磨、君も色々と辛い事を経験してきたようだが、これからもそれは続くだろう。少なくとも軍学校に入って最低で一年。配属されてから二年はな」

一磨は喉を鳴らす。口が渴き、息が僅かに荒い。ラーレはそれに気付きながらも、言葉を続

ける。その必要があると思っているからだろう。瞳は真っ直ぐと一磨を射抜いている。

「今更、辞めました。は無理だぞ？」

「覚悟は、出来ています」

初めて、蕎麦屋に入って二人の視線が真っ直ぐぶつかり合った。一瞬ではあったが、そのぶつかり合いに一磨はうろたえながら、ラーレは嬉しそうに顔の強張りを解した。

「その意気だ。こちらとしても給金を出して学ばせるんだ。教え甲斐のある奴が欲しいからな」

給金について事前説明を受けていた一磨だったがよくは判っていない。元々、身銭を持たせられるという事自体が無かったからだが、衣食住に関しては全て問題も無いとも言われていたので、生活に関しては不満を言うつもりは毛頭無かった。

金が無い中で、一磨は生活してきていた。今更、大金を与えられても使い方に困るだろう。

「身分もはっきりするし、一般的な教養も叩き込むから安心してほしい。除隊した場合は仕事の斡旋もしている。尤も、除隊しても住む場所は国から指定される上に、兵員不足が起こった場合、民草より優先的に徴兵されるがね」

「はい、ありがとうございます」

一磨にとって異世界での知識を学ぶ事が出来る、その事が有益だった。その上、除隊後、仕事の斡旋と住居までも用意してくれる国に驚きもしていた。いよいよもって、一磨の中で帝国がとてつもなく巨大な国家に創造されていた。内海から出た事の無い一磨からすれば、想像が暴走してしまうのは無理もない話しでもある。

「よし、蕎麦は旨かったかい？」

「はい。ご馳走様でした」

「門限付きで素行調査ありだが外出も可能だ。訓練生は二週間の長期休暇もある。尤も、教官から妥当判断を貰った奴らだけだがね。それまでこういった事は我慢してくれ」

「はい」

休暇なんて一磨には心底どうでも良かった。確かにまだ見ぬ異世界を観光して見たいと言う誘惑はあったのだが、絶対したい。というほど魅力的には感じてはいない。一磨にとって、この広い世界を生きているという事実だけで、未だ実感が沸いてきていない。内海を歩いたというだけでも当人からは夢のような出来事にも関わらず、異世界へ行く事になったなどと、本気で受け入れられるわけもなかった。

一磨は、未だ夢心地で全てを了承し、蕎麦屋を後にするラーレの背中を付いていった。

## 第六話

---

太陽は天高く上がり、一磨とラーレの頭上から心地よい暖かさを運んできている。

一磨はラーレに先導されるまま、内海の湖畔を目指していた。一磨はラーレの背中を三步ほど下がって追いかける。

ラーレから説明は受けている。今から向う先は内海湖に浮かぶ浮島。夫婦信仰の神事に使われる神聖な場所にして無断で立ち入る事が禁じられている場所。

その浮島を鍵として内海湖全体を門として利用する。

改めて考えて見たところで実感が湧かない。一磨にとってはそれほどに途方も無い話だった。そも、異世界とて全部を全部信じているわけでもなければ、一磨にとって内海を出るだけでも異世界へ行くようなものである。十六年間、一磨は一度たりとも内海から出た事は無く、その生活範囲も十河家を取り巻くものだ。実感が湧かないというのも仕方の無い事だった。

唯一、と言っている事はこの内海には戻ってくる予定がない。と言う事だけだろうか。一磨自身、帰ってくる事を是としていない。

蕎麦屋を出てから一旦、ラーレの関係者と接触し簡単な話し合いの場が設けられた。その際に、一磨はラーレより追っ手の心配は無いと言われてはいる。

その場限りのぬか喜び、ではないのだが長年否応にも暮らしてきた面々を思い浮かべるとどうにも心配になってしまう一磨であった。

出来る事ならばもう戻りたくは無い。まぎれも無い一磨の本心ではある。ラーレを追いかけて、やがてはたどり着く浮島。

今生の別れになることも、もうこの土地に戻って来ないことも判りきっているし覚悟を決めている。当然だ、一磨にとってこの内海には良い思い出などありはしない。出来るのならば過去を綺麗さっぱり消し去りたいとすら思ったほど、この地は辛く厳しい大地だった。

思いだされるのは辛い日々、十河という名に縛られた生活。何もかもが躰の名の元に行使され、一磨は地べたを這いつくばった。生々しくも記憶は鮮明に蘇る。

そのような記憶があつてなお、一磨の歩幅を小さく、ゆったりと歩かせる何かがあった。

一磨の胸中は揺れている。

何故、自分はこんなにも背徳的な気持ちに苛まれなければならないのか、一磨には理解出来なかった。それでも一磨は決して歩みを止めようとまでは行かない。止まりたくは無かったのだ。止まれば、何かが起こってしまう。歩く速度に似合わぬ妙な焦燥が一磨の身を焼いていく。

ラーレはそんな一磨を振り返り見る事もせず、ただ黙って一磨の歩幅に合わせて歩いていた。砂利を踏みしめる音、かすかな息遣い。諸々を感じ取りながら繊細な配分をとって一磨を労わるかのように、そっと誰にも気づかれぬ事の無い気遣いが一磨を支えている。

湖面と町を隔てる壁の役割を果たしていた雑木林の小道に入る。砂地が多く足の感触を捉えていった。互いに言葉を交わす事も無く、二人はただ黙って歩く。

気まずい、などと思っては居ない。ただ、その無言が至極当然の流れとしてラーレと一磨の両者間を漂っているだけにすぎなかった。ラーレには一磨に気軽さをもって問いかける話題が無く、一磨もラーレに話しかける勇気も無ければ余裕も無かった。

雑木林を抜ければラーレの腰あたりまで地面が隆起している土手が顔を覗かせる。二人は階段を上がり、土手上の湖畔端を道なりに歩き始める。

ラーレの後を追いながら、一磨は湖畔を歩いていく。内海と呼ばれる由縁はこの広々とした湖だった。今は太陽の光を反射し、煌びやかな湖面を作り成している。

横目に内海湖を望む。今にして思えば、こうしてゆったりと湖畔を歩いて内海湖を見た事すらなかったと一磨は気づく。最後に眺めたのは母が死んだあの日。それも夜の事であった。もっとも、眺めたと言っていいものかも判らないほどの出来事を経験している中訪れているだけに、一磨にとってこれほどゆったりと雄大な内海を眺める事も無かった。ゆえに一磨の視線は横を向いたままだった。

ぽっかりと穴が空き、そこへ数多の川が水を運び湖を作り成している。川は多く、内海は川と共に生き、湖と共存してきている。母のようだった。生き物の憩いを提供し、動植物を繁栄させ、人間までも生かす。女神となぞられる所以に感嘆するしかない。

母は今もこの湖で、きっと眠っている。考えれば考えるほど居た堪れなくなっていく、本当に自分はこれで良かったのかと、いや、今さらながら母の死を止められなかった事への自責すら浮かんできている。様々な気持ち、十六年分の吐き出せなかった物が一磨の思いが自分自身を締め付けていく。

言いようの無い後悔。もしもあの時こうしていれば、あの時、あのようにならなければ……。

本当に自分の選択は正しかったのか。今さらながら出るはずもない自問に何ともいえない不甲斐無さに頭を垂れ下げた。判らない、ラーレという軍人に出会い異世界などという夢物語を聞かされ承諾し、今まさにその異世界へ赴こうとしている事実が判らなかった。

覚悟を決めた、そう思っていたはずだ。ならば何故、自分の内に蔓延る後ろめたさがあるのだろうか。何故、自分は今までの後悔ばかり目についてこれから向う異世界に胸を躍らせる事をしないのだろうか。自分は本当にラーレを信頼しようとしているのか。そも、本当に異世界などという話を信じているのか。

判らなかつた。重い、何もかもが今の一磨にとっては重かつた。思考も、身体も、過去も、未来も。全てが重く一磨に押し掛かつてきていた。

「十河一磨」

前を歩きながら、ラーレは声をかけてきた。一磨の姓名をはっきりと呼びつつ立ち止まる。

その言葉、その対応に一磨はえもしれない不思議な気持ちを覚えた。呼ばれた名前は文字通り自分のものだった。はっきりと聞き分けられる言葉で、立ち止って十河一磨と言ったのは町が居なく目の前にいるラーレという軍人だ。

そんなものは判っている、にも関わらず、一磨には違って聞こえた。いや、今まで十河一磨など呼ばれても碌なことなどありはしない。だからだろうか、ラーレの十河一磨とは、呼ばれた本人からすれば、どんな人とも違っていた。

母のようでいて、そうじゃない。もやもやとするけれど、決して不快じゃない。という奇妙な思い。

「はい」

一磨は自然と頭を挙げた。その顔は少し強張って緊張している事が見て取れる。何か悪い事でもしたのかもしれないと思ってしまう一磨がそこには居た。不安の色が濃い。

一体何をしてしまったのだろうか、一磨はそんな事を考えていた。

「別れを済ませる人は、居るか？」

思わず身体が固まった。ラーレはおもむろに一磨の方へ向き直る。その顔は真正面から一磨を見据える真剣ながらも力みを見せないものだった。親身、なのだろう。一磨の事を心配してくれている。どこか穏やかさすら垣間見せる表情だった。

「大丈夫、です」

色んなものを飲み込んで一磨はそう答えた。

「そうか。なら、良い」

そう言って、一磨の肩に手を乗せるラーレの顔は打って変わって柔和なものだった。

どうしてこの人はこんなにも優しくしてくれるのか。一磨には理解できなかった。理解できなかったが、嫌いじゃない。

母のようで、それでいながら感じた事もない——それこそ父のようなでもある。自分の事を褒めてくれる。気にかけてくれる。それが何よりも一磨にとって嬉しかった。

「もうすぐだ、覚悟決めてついて来い。十河一磨」

二度、一磨の肩を叩いてラーレは前を向いて歩き始める。ラーレの背中には日の光が集まっているかのような眩しさ放っていた。少なくとも一磨にはとても明るく、とても大きく見えていた。

見た事も無い。大きくて、暖かく、力強い。

身体が火照る。得体のしれない熱が一磨を沸騰させていく。

「——はい」

名前を、正しい姓名を言ってくれた。そんな気持ちが身体の至る所から溢れてきてしまい、一磨は震える身体を止める事が出来なかった。

味わった事の無い喜び、懐かしい優しさ。

——せめて、せめて顎を上げ、口を嚙み、空を見上げよう。泣くにはまだ早い。僕は、まだ。何も成し遂げていない。まだ動き始めてもいない。取っておくんだ。これから始まる僕の、十河一磨の人生のために。ここぞという時のために今は我慢するんだ。

決心したところで辛かった過去の思い出が走馬灯のように頭を過ぎり、一磨は涙を止める事が出来なかった。

今、一磨は素直に喜んでいる。生きている事に対して、生を謳歌している事に感謝すらしている。

「それと、これを渡しておく」

ラーレは背負っていた袋を手に握ると一磨の方へと振り返る。

右手で握られているその長細いものは刀入れの袋だと知りながら、一磨は真正面に突き出されて少々戸惑った。

貸し与えられたものだが、一磨も刀を持ってはいる。稽古に使う事もあった。それこそ真剣での稽古など両手足をもってしても足りないほど経験している。だからこそその戸惑い。

刀はそれほど、一磨にとって重い存在。それを、そう簡単に譲り受けても良いものか、という思いと、泣き顔を何度も見せてしまっている事への羞恥がまぜこぜとなり、一磨自身も何をどうしたら良いのか判らなくなっていた。

逡巡にしては長い沈黙が二人の間を流れていたが、ゆっくりとラーレは肩の力を抜いた。涙を流しつつも、顔がころころと表情を変える一磨に優しい笑みを向ける。

「一磨、君が持つものだ」

顔が熱くなった。咄嗟、それでいて素早く一磨はその刀を受け取って右手で握りしめる。

「もう、君の所有物だ。大事にしてくれ」

受け取って早く背中を向いて欲しかった。そう思ったのは泣いている姿を見られる事がとても恥ずかしかったから。

そんな一磨の願いを裏切って、ラーレは優しく笑いかけながら一磨の頭をやさしく撫でる。

――ずるい。

一磨は心の中で呟きながら、声を挙げて涙を流した。溜め込んでいたものが全部出てきている。今の一磨にはそんな勢いを止める術は残されていなかった。